赤木 春菜
AKAGI Haruna

装飾と造形 – 渦巻文様を中心とした考察 – 作品「whirlpool」及び研究報告書

Ornament and Shape: A Study of Focused on the Whirling Pattern Work "whirlpool" with Research Paper

デザイン学領域群 クラフト領域

「whirlpool」
H3600×W2000×D2000 mm
漆、麻布、木粉、スタイロフォーム
2012 年

序章

本研究は、装飾とは自己と他者(世界)を分節する役割を持ち、そのはたらきから生み出される自己の表現について、渦巻文様を中心に、装飾と造形表現の関係について探るものである。

第1章　渦巻文様

太古から人類が文化を持っていたことは文様からうかがえる。文様はその成り立ちや歴史から見るに、宇宙自然の現れである。そして文様は「私」を組み込んだ宇宙自然を表すものであった。とすれば「文様」とは、人間がこの世界に存在することを意識した初めてのしるしであるということができる。つまり文様は人間と世界を分節する境界の役割を持つ。

この作用を顕著に表すのが渦巻文様である。世界各民族において水が渦を巻くパターンは多く、渦は神聖な文様である。

そして渦巻文様のほとんどは円や丸の形をとり、この円や丸を描くことによってできた間は、単なる穴や隙間ではなく、イメージが充満するスペースであり、ものを生み出す「間」や「空間」を作り出すのである。

第2章　縄文土器と渦巻文様

渦巻文様と深い関わりを持つ縄文土器を取り上げる。縄文中期に作られた縄文土器の代表的な様式である火炎土器は、始終口縁部に文様帯を設定する。それは土器の口縁部がその外側に広がる世界と対峙する境界線に当たるからであり、個体に目印を付け、ひとつの小さな世界として主体性を主張するためであると考察した。やはり渦巻文様は世界の分節としての役割を果たしていた。

また、縄文人は竹や貝殻、魚の骨やダニまでも用いて土器に様々な種類の文様を刻んでいた。この事例から、文様を刻む行為には境界や分節といった呪術的な力を必要とし、文化生活を築く拠りどころとする場合とは別に、土器に造形を施すこと自体に縄文人の喜びや戯れの感情があったのではないかと推察した。

第3章　渦巻と境界

渦巻文様が境界としての役割をどう果たしていたのか考察した。まず、福島県双葉郡双葉町にある清戸迫横穴古墳の奥壁に描かれた渦巻の壁画。次に、神奈川県小田原城に展示されている、巴文様の描かれた江戸時代の軍扇。最後に、現在でも各地で見られる、渦巻文様の描かれた緑の布を身につける獅子舞など、3つの事例を挙げた。

第4章　文様のはたらき

文様は古くから、人々が人間として生きてゆくための生活を安定させるべく、生と死を分節し、人と自然を分節してきた。それはかつてひとつの全体であった自分自身を分化してゆくことでもあった。

文様を刻むという行為は人の本能的行動なのであろうか。この人間の奥底から湧き上る衝動の構造とは一体どのようなものなのであるのか、フランス人哲学者、アンリ・ルイ・ベルクソン(Henri-Louis Bergson 1859-1941)の示す「過剰」という人間のはたらきに注目した。

「過剰」という人の本質的作用は、行動のために見るのではなく、見ることを楽しみ、聞くことを享受する。実用のために嗅ぐのではなく、香りそのものを喜ぶ。この作用が第2章で述べたように、文様を刻むという、人がものを作り出す行為自体に喜びを感じる要因ではないかと考察した。

第5章　作家たちの文様

3人の作家を取り上げ、それぞれの作家が文様や装飾をどのように造形や自身の表現に組み込んでいるのか、装飾と造形表現の関係性を探った。

陶芸作家 和太守卑良は土を練り上げ文様を刻み、宇宙自然から「土」を分節することで、世界を認識し、同時に無意識の世界を増殖させる。

陶芸作家 植葉香澄は作品「キメラ」を文様で埋め尽くしてゆく。文様を纏う「キメラ」は背景と形、図と地に分かれる際であり、ひとつのものにまとまる直前である。この時、文様は記号としての意味を失いつつ新たな意味を誕生させている。

前衛芸術家 草間彌生は、鏡とミラーボールの作り出す文様を用いて、無数に分裂してゆく自己の存在と永遠のイメージを重ね合わせてゆく。社会が徹底的に細分化、制度化されてしまった現代にあって、けっして分割しえぬもの、愛や生命、宇宙といったものへと私たちの目を開かせるのだ。

第6章　「whirlpool」及び研究報告書

「会津・漆の芸術祭2012」の展示会場となった三十八間蔵には古い人や物の記憶や気配が充満し、その気配は安息のようで、しかし少しの不穏があり、ゆらりゆらりと漂っていた。静かだけれど、強大なエネルギーの気配である。気配が集まってかたちになり、渦となってより大きなエネルギーを生み出す。そんなイメージが浮かんできた。

今回は乾漆技法で制作した。大きさはあるのに重さは伴わない、不思議な感覚であった。

漆は何層も塗り重ねて漆黒という独特の艶を出し、また乾漆のように麻布と漆を重ねてかたちをつくる。その独自の行程が膜を重ねることのようであった。そして出来上がった漆の表層は視覚だけではなく人の触覚にもはたらきかける。漆は皮膚や薄い膜のような触覚があると感じた。

終章

人々は文様を用いて世界や事物を分節する以外に、文様を刻む事で自身の精神や感情を癒し、喜ばせていた。縄文時代という遥か昔から、創造する事や自己を表現する事を楽しんでいたのである。

装飾を施すという意識よりは、世界とわたしの関係を探るために、装飾を取り入れていたということではないか。

つまり装飾とは自己と他者(世界)の認識の始まりであり、自己の表現が生まれる場所なのである。